

平成 29 年 4 月 26 日現在

機関番号：34310

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25770084

研究課題名（和文）1960年代のテレビ文化黎明期におけるテレビドラマ制作と文学

研究課題名（英文）TV drama production and literature in the early stage of the TV culture of the 1960s

研究代表者

瀬崎 圭二 (Sezaki, Keiji)

同志社大学・文学部・准教授

研究者番号：70413284

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：テレビというメディアを文学者たちがどのように受け止め、そこに何を期待したのか、文芸評論家の佐々木基一や、作家の安部公房、椎名麟三の動向を中心に調査した。文学者たちはテレビドラマの脚本を執筆することでテレビに関与していくケースが多いため、安部や椎名が脚本を担当し、映像が現存するドラマについては、映像を実際に視聴した上で、その表現や当時の視聴者の反応を考察した。また、安部や椎名のドラマを演出した和田勉の演出技法も調査分析した。

研究成果の概要（英文）：The Literati took the media called TV how, and what did you expect there? I investigated it around literary critic Kiichi Sasaki and writer Kobo Abe, Rinzo Shiina. Because the literati were to write the script of the TV drama and often participated in TV, I considered the expression of the drama and the reaction of the then audience after having watched the drama picture with the script of Abe and Shiina. In addition, I investigated and analyzed the direction technique of Ben Wada who directed a drama of Abe and Shiina.

研究分野：日本文学

キーワード：テレビ テレビドラマ 佐々木基一 安部公房 椎名麟三 和田勉 芸術祭

1. 研究開始当初の背景

(1)1953年に日本放送協会(NHK)東京放送局がテレビの本放送を始め、1959年の皇太子結婚の儀の際には経済復興の影響もあってテレビの普及が進んだ。したがって、1960年代はテレビ文化が日常のものとなった時期であったと言えるが、2011年にテレビは地上アナログ放送を終了し、新たな段階を迎えることになった。こうした社会状況の中で、テレビを歴史的に相対化しようとする本研究の着想が得られることになった。

(2)テレビ文化草創期を支えた関係者の回想録が多く出版され、社会学や歴史学、映像学がテレビを分析の対象としているにもかかわらず、本研究を開始するまで、日本近現代文学とテレビ文化との関係を考える研究は皆無に等しかった。1980年代以降、メディア論の視座を取り入れた日本近現代文学研究は、雑誌、新聞、ラジオ、映画など、続々と現れる新たなメディアと日本近現代文学の関係を問い続けているが、テレビと文学の関係を分析した体系的な研究は存在しなかったのである。その意味で、本研究の学術的な意義と可能性は多分にあった。

(3)本研究を着想する以前も、文学が消費される状況に対する関心と問題意識があった。拙著『流行と虚栄の生成 消費文化を映す日本近代文学』(2008年 世界思想社)で考察したのは流行(モード)が消費されていく現象と文学との関係であり、三越が刊行していた機関雑誌などのメディアや消費する女性の表象を分析の対象としたのも、消費、及びそれが先行する社会システムへの関心があったからである。消費という現象への関心は、その後刊行した拙著『海辺の恋と日本人 ひと夏の物語と近代』(2013年 青弓社)の研究成果にも表れており、近代の中で消費されていく海辺という場のイメージと、文学作品における様々なレベルの表象や恋愛物語との関係を考察した。こうした研究成果をふまえ、文学が消費されていく現象をテレビという日常的なメディアの中で捉え直していく発想が得られた。

(4)日本近代文学が教養としての意味を失い、文学が消費の対象となっている社会状況の中で、文学の価値を自明とするのではなく、その表現がわれわれの日常にどのように浸透し、それがどのような意義を持っているのか、改めて問い直す必要が生じている。われわれの日常のものとしてのテレビ表現は顧みられることが少ないが、ひとびとに直接働きかけることのできる映像表現の中に、われわれの日常的な文学の姿がないか、現在の社会状況もふまえた研究課題を発想する必要があった。

2. 研究の目的

本研究課題申請時の研究目的は、テレビ文化の黎明期において、文学及び文学者がこの新しいメディアをどのように捉え、そこにどのような可能性と限界を見ていたのかという点について、文学作品のテレビドラマ化という現象を中心に考察していくところにあった。文学作品のテレビドラマ化は、原作となる作品本文を読まずとも受容できる、言わば文学の消費を結果的に促すことになるが、そこに潜む様々な力学を暴き出すことも本研究課題申請時の主要な研究目的であった。文学研究の一領域を開拓するこうした研究目的だけでなく、テレビ文化を通じて生成されるわれわれの日常を問い直し、そこに潜む力学をあぶり出そうとする意図が、それらの研究目的の背景にあった。

3. 研究の方法

(1)テレビ文化黎明期における文学者たちのテレビに対する認識のあり様や、文学者のテレビ出演、テレビ視聴などを調査した上で、特に積極的にテレビに関与した文学者を数名取り上げ、基礎的な調査を進めた。

(2)本研究課題の材料となる当時の専門誌『テレビドラマ』を全冊収集し、そこに掲載されている文学者の記事やテレビドラマ脚本を整理した。また、当時のテレビ局が刊行していた専門誌を多く渉猟し、資料収集に努めた。

(3)文学者たちのテレビに関する関心と期待は、テレビドラマの脚本執筆という形で実現するケースが多いため、映像が現存するテレビドラマを対象に、脚本と映像作品の表現について考察した。その際、映像を保存しているいくつかのアーカイブスを利用した。

(4)研究対象に据えたテレビドラマに関連する同時代の資料を、当時の新聞、雑誌類から収集し、その分析を行った。特に、テレビドラマについての当時の評論家や視聴者の反応を重要視し、ドラマの脚本を担当した文学者や、演出の担当者らとの認識のズレをあぶり出した。

(5)当時の芸術的なドラマの演出を多く手がけていたテレビ・ディレクターを研究対象に据え、その芸術的試みの中に潜んでいる文学性を抽出した。そのディレクターが吸収したであろう多くの文学表現、映像表現、思想を追跡調査した。

(6)当時のテレビドラマの映像表現を分析するために、当時の映画表現や演劇表現、言語表現にも目を配った。映画や演劇、小説等の表現を参考にしつつ、それとは異なるものと

して模索されたテレビ表現の内実を明らかにしようと努めた。

4. 研究成果

(1)本研究課題を進めるにあたって、まず、テレビ文化黎明期における文学者たちのテレビに対する認識のあり様や、文学者のテレビ出演、テレビ視聴などを調査したことが、結果的にその後の研究の基盤を形作ることになった。その作業の中で、当時のテレビドラマ専門誌『テレビドラマ』を調査の軸に据える着想も得られた。

(2)本研究課題申請時の研究計画では、文学作品がテレビドラマ化されるプロセスの中で、どのような文学作品がその対象として選択され、その選択によって文学作品がどのように名作とされていくのか、あるいは、原作としての文学作品がどのように改変、修正、省略、増補されていったのか、原作と脚本、映像作品を検証する作業を行うことを予定していた。しかし、本研究課題を実際に進めると、当時のテレビドラマ映像やその脚本は、ほとんど現存していないことが判明したため、映像が現存するテレビドラマに研究対象の中心を置く方向に転換した。

(3)当時制作されたテレビドラマで映像が現存するものは、そのほとんどが芸術祭受賞作品であったため、それを研究の中心に据え、一作品ずつ調査、分析していった。その作業の中で、テレビ局の協力により、一般公開されていない映像作品を視聴したり、当時の番組制作の関係者に話を聞く機会が得られたりしたのも、大きな研究成果だった。

(4)当初の研究計画通り、テレビドラマをめぐる当時の視聴者の反応を収集し、それを整理することができた。特に、ドラマを制作した側の意図と、新聞紙上に掲載された一般視聴者の反応との間に齟齬が見出されたことは、本研究課題の推進において重要であった。

(5)本研究課題を進めていく過程の中で、テレビドラマ制作と文学との関係を捉え直すことができた。当初は、テレビドラマ制作における文学者の関与に焦点を当てていたが、テレビ関係者の側に潜在化されている文学性にも目を配る必要に駆られ、テレビ・ディレクターの文学経験も考察の対象とした。この作業は今後も進めていく予定である。

(6)本研究課題の推進は、学界でも言及され、学会誌に拙論が紹介されることもあった。また、海外でも本研究課題の一端を口頭発表する機会に恵まれ、その内容を海外の学会誌に発表することもできた。

(7)本研究課題を推進していくにつれ、NHKの

内部に保存されているテレビ映像を参照する必要が生じたため、NHK 番組アーカイブスの「学術利用トライアル」に、研究課題「1960年代のテレビドラマと 文学 をめぐる基礎的研究 谷川俊太郎作「あなたは誰でしょう」・小田実作「しょうちゅうとゴム」・寺山修司脚本「一匹」を読む/見る」を応募し、採択された。一般公開されていない映像を視聴することができたのは大きな研究成果であり、研究がより一層進展した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

瀬崎圭二、「和田勉の演出技法 芸術的テレビドラマの探求」、『人文学』、査読無、第199号、2017年、109~148頁

瀬崎圭二、「テレビへの期待 1960年前後の安部公房」、『日語日文学研究』、査読無、第100輯2巻(日本文学・日本学篇)、2017年、37~59頁

瀬崎圭二、「椎名麟三作「約束」を読む/見る」、『同志社国文学』、査読有、第85号、2016年、96~110頁

瀬崎圭二、「安部公房作「煉獄」を読む/見る」、『国文学攷』、査読無、第228・229号併号、2016年、65~79頁
<http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039707>

瀬崎圭二、「記憶の映像化 安部公房作「目撃者」を読む/見る」、『日本近代文学』、査読有、第93集、2015年、122~136頁
http://doi.org/10.19018/nihonkindaibungaku.93.0_122

瀬崎圭二、「安部公房作「虫は死ね」を読む/見る」、『近代文学試論』、査読無、第52号、2014年、53~65頁
<http://doi.org/10.15027/39139>

瀬崎圭二、「安部公房作「日本の日蝕」を読む/見る」、『同志社国文学』、査読無、第81号、2014年、314~326頁
<https://doors.doshisha.ac.jp/duar/repository/ir/22774/?lang=0>

瀬崎圭二、「作家が見たテレビ 可能性としてのテレビドラマ」、『広島大学大学院文学研究科論集』、査読無、第73号、2013年、45~65頁
<http://doi.org/10.15027/35599>

〔学会発表〕(計2件)

瀬崎圭二、「テレビのなかの 文学 安

部公房と芸術祭」、韓国日語日文学会
(2016年冬季国際学術大会 シンポジウム
「メディア時代における日本文学と大衆文化」)、2016年12月17日、ソウル(韓国)

瀬崎圭二、「椎名麟三作「約束」を読む /
視る」、同志社大学国文学会、2016年6月12
日、同志社大学(京都府京都市)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

瀬崎 圭二 (SEZAKI, Keiji)
同志社大学・文学部・准教授
研究者番号：70413284

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号：

(4) 研究協力者

なし ()